

物性科学領域横断研究会「凝縮系科学の最前線」

および凝縮系科学賞授賞式

2009年11月29日(日)から12月1日(火)にかけて、東京大学で物性科学領域横断研究会が開かれました。この研究会は今回で第3回となりますが、2008年度で終了した秋光純先生代表の特定領域の「異常量子物質」に替わって、2つの新学術領域研究(上田グループ、鹿野田グループ)を加えて7グループ合同による開催となりました。第1回は「超伝導」、第2回は「スピン」というテーマがありましたが、今回は特定のテーマを決めずにそれぞれの最新成果の紹介がなされました。3日間の会議は、参加登録者277名、口頭発表21件、ポスター発表113件と大盛況で、凝縮系科学賞授賞式および懇親会も行われ、大変充実した研究会でした。

本特定からは、川村光代表の領域全体の研究成果を報告された「フラストレーションが創る新しい物性」、広井善二氏の「カゴメ系とスピン液体」および廣田和馬氏の「リラクサー誘電体にひそむランダムネスとフラストレーション」の3件の口頭発表と多数の本領域関係者のポスター発表がなされました。筆者にとっては、廣田氏の講演発表を拝聴する最後の機会となりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。初日には、第4回凝縮系科学賞授賞式が行われ、実験部門では千葉大地氏(京大、化研)が「強磁性半導体の電界効果に関する研究」の業績において、理論部門では桂法称氏(理研)が「磁性強誘電体の理論的研究」の業績においてそれぞれ受賞されました。お二人の受賞記念講演をお聞きして、現在発展が著しいスピントロニクス分野は、このような若い研究者の先駆的な研究によって進歩していることを実感いたしました。各グループの個々の発表へのコメントは省略いたしますが、全体的にスピン・電荷・格子の自由度を複合的に取り扱って物質研究を進めるスタイルが定着してきた感があります。また本特定グループ外に「フラス



トレーション」や「カイラリティ」といったキーワードが普及しているように感じ、また各特定・新学術領域グループの研究にはかなりの共通部分が見受けられました。最近、遠視が進行して論文が読みづらくなり耳学問に頼る傾向にある筆者にとって、工夫されたスライドによる講演は研究の理解に大変役立ちます。物理学会での物性関連のシンポジウム講演とポスター発表を一堂に集めたようなこの横断研究会は、日本の最前線の研究成果やトピックスをまとめて勉強する

には最も適した会合だと思います。みなさんも第4回領域横断研究会には、是非参加されることをお勧めいたします。プログラムは<http://ryoikiodan.org/> をご覧下さい。(出口博之)